VI. 精神から存在者へ：言文一致運動と大逆事件（1）

VI-1 法外な世界と《文士》

（前回までのおさらい）

【居場所を失った武士たち】

下級武士を中心とする（正確には下級武士から豪農層を中心とする、つまり身分のあわいを中心とする）戊辰戦争、西南戦争、自由民権運動を経て、国民皆兵の立憲主義国家となった日本。しかし、近世に失われたアジールも回復せず、かわりに国土を法が覆い尽くした。こうして、幕末維新期にあれほど活躍した武士たちは、存在のための場を失ってしまった。

→ 存在は場を必要とする、というカントの規定に反する前–存在者としての、《元武士たち》。いるのかいないのかわらかない彼らこそ、近代日本を推進させる重要な役割を担うことになるだろう。

【死・孤独・暴力に対する不安の、敗者たちによる勇気ある解決】

❶ 地球上自由生［水戸・土佐］……地球こそわれわれの居場所。法＝関係による規定など必要ない。

→ 日本にいながらにして、場を地球とみなすことで居場所をつくるもの。

❷ 植木枝盛［土佐］……戦うことを恐れてはならない。人間は本質的に、自由を求めて戦う動物。

→ 戦うことで、場を作り出せばいい。

❸ 大陸浪人［福岡・熊本など］……大陸に出て、いまだ革命なき世界の一助となろう。

→ 日本に居場所がないなら、旅に出よう。

❹ 北村透谷［小田原］……文士＝文のサムライとなる。自分の戦いに刀剣は必要ない

→ 精神にこそ、真のアジールがある。

VI-2 恋愛、この非合理的なもの

● 純文学＝私小説の誕生

ただ自分のことを語るだけの「私小説」。これが日本の純文学の究極の形。なぜこれが究極なのか。

◆ 小説とはなにか？ （坪内逍遥『小説神髄』1885~6 年）

されバ小説ハ、見えがたきを見えしめ、曖昧(おぼろげ)なるものを明瞭(あきらか)にし、限りなき人間の情慾を限りある小冊子のうちに網羅し、之れをもてあそべる読者をして自然に反省せしむるものなり。造物主は天地万象を造りて私なし。恰も我党小説作者が種々の人物を仮作(つく)りいだして毫末も偏頗愛憎なく、行住進退なべてみなひたすら自然に戻らぬやう写しなせるに似たりといふべし。

小説と正史との間の最も重大なる差別といふハ、脱漏を補ふといふ事に外ならざるべし。…瑣細なる事実をさへ隈なく写しいだすことハ、正史のなし得ざる所にして、小説の得意とする所になん。…補遺とハ何ぞや。曰く、正史に漏たる事蹟を補ひ、正史にハ細述せざる当時の風俗、習慣などを見るが如く、描けるが如く、いと精密に写しいだして、一部の風俗史をなすことをいふなり。されば此裨益ハひとり時代物語（過去小説）の専占するところにして、余の小説にハこの事なし。さハあれ世話の小説といへども、後世の人より之を見れバ過去小説に外ならざれバ、何れにしても小説にハ此裨益あるハ争ふべからず。…史と小説とハ其源おなじ。

→　逍遙によれば、小説は虚構を扱う戯作ではない。歴史の脱漏を補うもの。たんなる虚構を扱うものではない。出来事になる直前で、精神のなかに、あるいは民衆の他愛のない遊戯のなかに消えてしまったものを、もう一度歴史のなかに組み込もうとするもの。

【北村透谷】

1868 年、旧小田原藩の没落士族に生まれる。自由民権運動に身を投じるも、大井憲太郎率いる朝鮮内政改革運動（大阪事件）に加わるも、活動資金を得るための銀行強盗に絶望して運動を離れ、数寄屋橋教会で洗礼を受けたのち、文学者の道へ。

恋愛は人世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ。
想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城となるは、即ち恋愛なり。
此恋愛あればこそ、理性ある人間は悉く悩死せざるなれ、此恋愛あればこそ、実世界に乗入る欲望を惹起するなれ。

「厭世詩家と女性」1892

→　法／政治より《恋愛》。この言葉に島崎藤村ら多くの若者が震撼。

→　以後、森鴎外や夏目漱石のような当代一流の知識人、白樺派のような藩閥政府につらなる一族の子弟、芥川龍之介や三島由紀夫のような帝国大学の俊英が、「恋愛小説」を書くようになる。

Cf. 近世社会の恋愛❶

二十五日夜雨……今晩、垂花出づ。……雲雨の遊〔男女の契り〕を為すや已に七年、一日も我を負かず、去月の約婚の後より、夜々共に別離の情を嘆ず、嗚呼、後会期し難し、伏して憶う、往時夢の如く幻の如し、将に離別の近きに在りて愁情の切なるに堪えず、因て以て別涙に攬りて始末を書す、時に垂花歳三十二、出て玉井八大夫の臣僕作兵衛に嫁すと云う。

石橋辰章『家乗』

→　紀州藩家老三浦為時に仕えた下級武士石橋辰章（生菴）の日記（1672 年）。30 歳のとき、三浦氏用人の娘を娶るよう命じられる。二週間後「垂花来る、潜かに相語らいて人世の改変を歎じ、且つ終身相忘るべからざるを約す」。

→　身分違いのためいっしょになれなかった生菴と垂花。たがいに三十をすぎるまで独り身で逢瀬をくりかえした七年間、まちがいなく恋愛関係にあり、しかも終生にわたる愛を誓っていた。

Cf. 近世社会の恋愛❷

「これぞ二度都へ帰るべくもしれがたし。いざ途首の酒よ」と申せば、六人の者おどろき、「ここへもどらぬとは何国へ御供申し上ぐる事ぞ」といふ。「されば、浮世の遊君・白拍子・戯女見のこせし事もなし。我をはじめてこの男ども、こころに懸る山もなければ、これより女護の嶋にわたりて、抓みどりの女を見せん」といへば、いづれも歓び、「譬へば腎虚してそこの土となるべき事、たまたま一代男に生れての、それこそ願ひの道なれ」と、恋風にまかせ、伊豆の国より日和見すまし、天和二年神無月の末に行方しれずになりにけり。

井原西鶴『好色一代男』1682 年

→　近世社会、**非合理な**恋愛ぬきに、《家道徳》にしたがってただ子をつくることが求められる人間がいる一方で、他方、一部の人間においては、恋愛はおろか、子をつくることさえ罪である。恋愛＝子の一

歩手前で、ただ性欲を闇に捨てて都市を生き抜くことが「粋」といわれる《都市道徳》があった。

→ 近世において、欲望は生殖と性欲とに分割されて統治される（近世日本における《性の歴史》）。そのあいだにあって両者をつなぐ恋愛は不可能。

→ 家道徳から排除され、しかも都市道徳においても浪費されるだけの娼婦（遊女）だけが、かろうじて恋愛し、かつての『源氏物語』的世界観を継承していた。その点から、なぜ本居宣長が『源氏物語』論を書いて道ならぬ恋を絶対的に肯定したかがみえてくる。

→ 明治期の大臣が娼婦と結婚する例がいくつかみられることの意味を考えることもできる。

VI-3 透谷の文学——文士であること

【ポストラストサムライ——文士】

吾人は記憶す、人間は戦ふ為に生れたるを。戦ふは戦ふ為に戦ふにあらずして、戦ふべきものあるが故に戦ふものなるを。戦ふに剣を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると剣を以てすると、戦ふに於ては相異なるところなし、然れども敵とするもの〻種類によつて、戦ふもの〻戦を異にするは其当なり。戦ふもの〻戦の異なるによつて、勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に帰る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戦士は、斯の如く勝利を携へて帰らざることあるなり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企図するところあり、空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」1893 年

→ 透谷にとっての言語は刀剣と同じ。

→ また、世界自体が言葉をもつ。だから言葉で戦うことは、現実における戦いと同じ。テロリズムは必要がない。

（透谷の言語観）

万物自から声あり。万物自から声あれば自から又た楽調あり…何事も何かの声なるべし、何かの声にては分らず何の声ぞと根問ひするはうるさき我友なり。何かの声にて分からねばわからぬにて好し、われはこの何かの声をたのしむこと限りなきものなり。

「幽境の逍遥」1893

文章は筆官の製作とのみ思ふべからず、天地はそのま〻にて一大文章なり。

「電影草盧淡話」1893

文章即ち事業なり。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」1893

【秘密とはなにか】

しかし、言葉で戦う、とはどのようにして可能になるのだろうか。ヒントは「**秘密**」。

心に宮（みや）あり、宮の奥に他の秘宮あり、その第一の宮には人の来り観る事を許せども、その秘宮には各人之に鑰（かぎ）して容易に人を近（ちかづ）かしめず、その第一の宮に於て人は其処世の道を講じ、其希望、其生命の表白をなせど、第二の秘宮は常に沈冥にして無言、蓋世（がいせい）の大詩人をも之に突入するを得せしめず。

……人には各自に何事かの秘密あるものなり。……日常思惟するところのもの極めて高潔なる事あり、極めて卑下なる事あり。俗人は之を蓋(おほ)はんとし、至人は之を開表して恥づるところを知らず、俗人は心の第一宮に於て之を蓋はん事を計策す、故に巧を弄して自ら隠慝するところあるなり、然れども至人は之を第二の心宮に暴露して人の縦(ほしいまゝ)に見るに任す、……人須(すべか)らく心の奥の秘宮を重んずべし、之を照(あき)らかにすべし、之を直(なほ)うすべし、之を白からしむべし、之を公けならしむべし

「各人心宮内の秘宮」1892

→ 秘密とは、誰にも知られていないことによって秘密なのではない。誰かに打ち明けることによってはじめて秘密である。

→ 《法》はたしかに、内面における自由を保護する。しかし、保護すると称して、ひとの活動を公私に分割し、政治の世界から除外するだけのことである（近代における《性の歴史》）。かつてひとの欲望を性器／生殖器に分割して統治したこととなにがちがうのか。

唯だ夫れこの心の世界斯の如く広く、斯の如く大に、森羅万象を包みて余すことなく、而してこの広大なる心が来り臨みて人間の中にある時に、渺々たる人間眼を以て説明し得べからざるものを世に存在せしむるなり。
…人間の中に存在する心は至大至重のものにして、俗眼大小の以て衡すべきにあらず、学問律法の以て度測すべきものにあらず、小善小仁の以て論ずべきにあらざるを示せしに外ならず。

「各人心宮内の秘宮」1892

→ 精神の世界は世俗の世界（学問律法）より大きい。精神の広大な世界を外＝世俗・学問律法の世界に晒すことは、なにを意味するのだろうか。

→ **告白＝恋愛革命。**政治制度のうえでいかに法が確立し、自由が拡大しようと、また刀剣による戦いで権力者を打倒しようと、都市に、農村に浸潤した近世道徳は簡単にはなくらない。

→ 精神における自由の実現なしには、真の社会変革はありえない。文士の戦いはつづく（最良の継承者としての島崎藤村・志賀直哉）。

VI-4 文士の究極の理想

【世界平和】

人生は戦争の歴史なり。刀鎗銃剣は戦争にあらず。人生即ち是れ戦争。人の性は不調子なり、人の命は不規律なり、争ふ事を好むは猿猴(ゑんこう)よりも多く……。世は相戦ふ、人は相争ふ、戦ふに尽くる期あるか。争ふに終る時あるか。殺す者は殺さるゝ者となり、殺さるゝ者は再(ま)た殺す者となる。勝と敗と誰れか之を決する。シイザルの勝利、拿翁(ナポレオン)の勝利、指を屈すれば幾十年に過ぎず、これも亦た蝴蝶の夢か。誰れか最後の勝利者たる、誰れか永久の勝利者たる。
……不調実(インコンシステンシイ)にして戦争の泉源なりとせば、調実は平和の始めなり。争はず戦はざる事を得るはひとり調実なりとせば、終(つひ)に勝たず終に敗れざる者、ひとり調実のみならむ。終に勝たず終に敗れざる者は、真に勝つものにあらざるを得んや。故に曰く、最後の勝利者は調実なりと。

「最後の勝利者は誰ぞ」1892 年

→ たとえばキリスト教徒の内村鑑三は、日清戦争前のこの時期、まだ戦争を外科手術として肯定していた。

→ 透谷よりはやく「平和」の概念にたどり着いた近代日本人はいない。

→ 文士は平和のために戦う＝《純文学》の誕生へ。